

Title	「因果的説明」のポリティックス(I) : エスノメソドロジー的視点から
Sub Title	Politics of the causal explanation (I) : an ethnomethodological turn
Author	水川, 喜文(Mizukawa, Yoshifumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1992
Jtitle	哲學 No.93 (1992. 1) ,p.201- 222
JaLC DOI	
Abstract	The action theorists have been adopting the causal explanation especially in philosophy and the social sciences. This article discusses the causal explanation of action from the stand point of ethnomethodology and conversation analysis First, rethinking how the causal theory and anti-causal theory were developed in philosophy, I introduce Kuroda's critics of general causality and his original causal theory. He situated intentional action as the central concept of the action and wrote that the action is a certain change of the world caused by the human agency. According to him, when a human agency as the resource of causality exists, there is an actions. Second, I present an example in which Kuroda's causality can not be adopted clearly, and introduce the ethnomethodological point of view to the action and the causality. Ethnomethodology facuses on the natural language and considers the interaction and the description of action as a key situation in terms of the action. Kuroda stated the human agency is the key concept of the action, so his theory cannot avoid adopting causality to his action theory. It is true that members of society think and use the causal explanation as a feature of the settings, but in the ethnomthodological view, the causality and the actor emerge in the interaction especially in the sequential order of the activity. Finally, the mundane reasoning of causality is discussed, in which the work of specifying and understanding causality emerges "from within" the local sequence of the settings, as regards politics.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000093-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「因果的説明」のポリティックス (I)

——エスノメソドロジ-的視点から——

水 川 喜 文*

Politics of the Causal Explanation (I)

—An Ethnomethodological Turn—

Yoshifumi Mizukawa

The action theorists have been adopting the causal explanation especially in philosophy and the social sciences. This article discusses the causal explanation of action from the stand point of ethnomethodology and conversation analysis

First, rethinking how the causal theory and anti-causal theory were developed in philosophy, I introduce Kuroda's critics of general causality and his original causal theory. He situated intentional action as the central concept of the action and wrote that the action is a certain change of the world caused by the human agency. According to him, when a human agency as the resource of causality exists, there is an actions.

Second, I present an example in which Kuroda's causality can not be adopted clearly, and introduce the ethnomethodological point of view to the action and the causality. Ethnomethodology focuses on the natural language and considers the interaction and the description of action as a key situation in terms of the action. Kuroda stated the human agency is the key concept of the action, so his theory cannot avoid adopting causality to his action theory. It is true that members of society think and use the causal explanation as a feature of the settings, but in the ethnomethodological view, the causality and the actor emerge in the interaction especially in the sequential order of the activity.

Finally, the mundane reasoning of causality is discussed, in which the work of specifying and understanding causality emerges "from within" the local sequence of the settings, as regards politics.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学)

「因果的説明」のポリティックス (I)

本稿では、エスノメソドロジー・会話分析による因果論の検討を行いたい⁽¹⁾。

エスノメソドロジーとは、現代社会学の一つのパースペクティブで、日常的知識を人々の方法 (ethnomethod) という観点から研究するものである。会話分析は、エスノメソドロジーの発想を具体的な自然言語の会話データの分析に応用した研究である。

さて、行為論という文脈に、「因果的説明」というものがのりやすいのはいうまでもない。ある行為 (結果) を、先行する出来事 (原因) から説明するということは、日常的にも当り前のこととして、普通に行われる。

本稿では、まず第一章において、因果論が今までどの様に述べられてきたかを再検討し、第二章において、実際の相互行為場面、特に会話場面についての因果論的分析の困難さを指摘し、エスノメソドロジー的転回をはかってみたい。因果という概念は、哲学において様々に議論されてきた。カント、ヒューム、デカルトといった因果論的系譜と、特に 1960 年前後から盛んになった反因果論的系譜は常に対立してきた。そのなかで、ヴィトゲンシュタイン、アンスコムなど近年の反因果論的な議論を吸収しつつ、「因果」を行為の中心にすえて議論したのが黒田 亘である。黒田の晩年の因果論を検討しつつ、エスノメソドロジー的な批判を加えていきたい。

また、社会科学における、因果論についても若干の考察を行いたい。個別的出来事の記述同士の連関を特定する手段として因果が使われることについての検討である。例えば、「木こりが斧をふりかざして木に向かってふりおろす」という動作 (結果) の記述に対して、「木を切り倒すため」という記述が行為者の意図であり原因であるのかどうかを社会科学者は考察してきた⁽²⁾。しかし、我々の直面する日常的世界では、こういった出来事は、個別の文脈を離れて生起するものではない。また、行為は、単独に生起するのではなく、連続した現象として現われてはじめて秩序だったものとして理解できるものとなる。例えば、沈黙という行為をしたことがわか

るのは、ただ行為者が発声しない状態があればよいだけではない。行為の連続の中で、発声すべき場所で発声しないから、「沈黙」として理解されるのである。このように、現実の場面で、行為は、出来事としての連続性をもっているということを考えた上で、従来の「因果論」や黒田の因果論がどれだけ有効なのか、そして、エスノメソドロジーの立場から何がいえるのか考察していきたい。

第三章では、これまでの議論をふまえ、行為を因果的に考察するということが、日常的な知識の根幹にあることを認めつつ、その利用の方法(ethnomethod)を考察していきたい。そのために、因果的説明が、「素人 layman」によって使われる場面を問題にしたい。因果的説明というものは、理論的に考察されるだけのものではなく、現実の社会を見渡してみると、日常的な場面で因果は利用されているのである。もちろんその場合、学問的に厳密な意味での因果ではなく、疑似的な因果を利用して話を造り上げているのだが、実際の場面で使われる因果という説明方法がどの様に使われているのかということは、社会学の課題として十分なりたちうるものである。「先祖供養をしないから交通事故にあった」とか「疲れているから怒りっぽい」というような因果的説明が、現実社会の中で使われうる限り、一笑に付すことはできないだろう。むしろ、いわゆる厳密な意味での因果的説明も、こうした日常的な知識の中にある因果的説明が利用がなければ理解できないのだ。

因果的説明とは、複数の行為者間で協同で働く（働いてしまう）ポリティックなのである。本稿は、エスノメソドロジーという手法を使い、因果的説明を、それを適用したとたんに、その場面の参加者に影響を及ぼしてしまう「作用」として扱ってみようとする試論である。

第一章 因果論の沈黙

一定の現象が、ある原因によって生じたとする因果論は、近代自然科学

「因果的説明」のポリティックス (I)

の論理を支える上で重要な前提となっている。20 世紀初め以来社会科学では、一般的に、この自然科学的な因果論にたいして次のように社会科学の因果論を位置づけていた。すなわち、自然科学では、自然現象と歴史現象とを区別せず、歴史性の無い自然的世界の「説明」を行うのに対し、社会科学では、歴史性のある行為者の内面的な追体験を構成し、「理解」によって理論を構築する、と。M. ヴェーバーの理解社会学においては、(歴史性のある) 行為者が付与した行為の意味すなわち「動機」を一つの「原因」とし、行為の経過や影響を「結果」とすることで、行為の因果的な説明が行えるとした。常識的にいっても、こうした方法は、理解しやすいものである。

ヴェーバーによれば、社会学とは、

「社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学を指す [Weber 1922=1972: 8]」。

さらに、次のようにも述べている。

「『社会的』行為という場合は、単数あるいは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為を指す [Weber 1922=1972: 8]」。

「社会学」が、「社会的行為」の「学」であるのならば、「社会的」なるものから、社会学を逆照射することもできるであろう。物理学における量子力学の発展、1960 年代以降に展開した新しい科学哲学により、科学は決定論的な因果的説明をしなければならないという圧力から解放された。古典物理学の因果的説明を模範として展開してきた近年の社会科学においても、もはや「学」の独自性を「因果的説明による科学」に限定する必要がなくなってしまった。「社会学」が、「社会」の「学 (Wissenschaft)」ならば、「社会的」なるものすなわち、「他の人々の行動と関係を持つこと」そして「行動の過程が、行為者の意味に左右される」という現象から考えていく

必要があるだろう。

さて、社会学において、行為についての因果論というものが正面から扱われたということはまれであろう。むしろ、哲学や自然科学での因果論を社会学に適用してきたと考える方が妥当であろう。ここでは、因果論とはいったいどんなものなのか、1960 年前後から因果論を中心に扱ってきた、いわゆる論理実証主義グループの知見を取り入れつつ社会学における因果論の扱いについて考察していきたい。彼らは、主に反因果論的な議論をするものが多いが、そのなかで、「因果論」を機軸として行為について考察したのが、黒田 亘である。ヴィトゲンシュタインの影響を受けた黒田亘は、通俗的な因果論を批判し、近年の反因果論的議論を吸収しながらも、「因果論」へと回帰していった。この回帰の方法こそ、因果論の方向性を表わしていると思われる。

黒田は、行為の「因果的説明」の重要性を以下に述べるようにして示していった。まず、行為についての反因果論的な議論を二つにまとめている [黒田 1975: 274-275]。

第一のものは、「原因による説明」と「理由による説明」を対立させる立場である。これによれば、我々が行為の説明や理解の頼りとしている「意図」「動機」「目的」といった概念は、因果的説明のためのものではない。このような概念を語ることによって、我々は、行為の理由を明らかにしようとしているのだ。行為を、「原因」からではなく「理由」から考察することは、行為を単なる物理的・生理的現象から区別する根本的に重要である。従って、行為の説明の全てを因果的な説明に還元するのは自由の否定につながる。……というものである。

第二のものは、「帰責論 ascriptivism」と呼ばれるものである [黒田 1975: 275-276]。この見解によれば、「X は……をした」というかたちの発言をする場合、この文（行為命題）の主な機能は、事実の記述や説明にあるのではなく、法や道德の規則にしたがって、一定の人間に行為の責任を

帰すことである。つまり、行為命題は、記述的 (descriptive) ではなく帰責的 (ascriptive) であるとするものである。

しかし、黒田によれば、前者は、行為の言語の基本的枠組みが因果のカテゴリーによって決定されていることを認めなければ、「原因」と「理由」を区別できないし、後者は、行為の主体が誰であるか、という行為の結果についての因果的な責を負うのは誰かを決定することが帰責論の前提となっていると批判している。

さらに、黒田に従って、この二つの反因果論的見解を検討していってみよう。黒田は、原因と理由を対立させる立場と記述と帰責を対比させる議論について、次のような「ヒュームの解釈」を因果論の標準的な理論とし、行為はその枠に収まらないものとして設定していると議論した。

「ある出来事 (A) が別の出来事 (B) の原因である」という関係は A と B を観察するだけでは確定できない。観察できるのは A が B に時間的に先行することだけである。だがわれわれは、A と同種の出来事には B と同種の出来事が規則的に後続する、という関係のあることを多くの観察によって知ることができる。この規則的關係に基づいてのみ、A が原因となって B が生じた、という主張が成立するのである。したがって、A が B の原因である、とはつぎのことを意味する。すなわち、A に続いて B が生じるという継起の関係は、A タイプの現象には B タイプの現象がつねに後続するという一般法則の一例である、ということだ [黒田 1975: 276]。

このような因果論は、社会科学でも一般的に使われているものである。特に社会調査を統計的な処理をして「マクロ」に社会を見ていく場合、原因として独立変数をおき、結果として従属変数をおき、その間に媒介変数をおくことで、社会を近似的な関数関係としてモデルを構築する。その場合も、社会に関する因果的な一般法則は成り立ちうるという前提のうちに進められているのは言うまでもない。このような「マクロ」社会学は、行為

の「説明」と「記述」を混同している素朴な実証主義に陥る危険性があるとも言えるだろう。さて、このような解釈では、因果的記述そのものがこういう一般法則を前提としているために、反因果論者が問題にする「記述」と「説明」の差異は、一般法則の明確さに依存しているのみで、本質的ではなくなってくる。ヒュームの解釈をターゲットとする反因果論者は、「記述」と「説明」の区別が本質的となるのは、「行為」を扱うときだけであり、その外では、一般法則がそのまま成り立つということを暗黙に認めていると黒田は批判する。

さらに、原因・結果という必然的結合に対応する事実、因果的推論を下すものの心にあって、外界には存在しないものであると論じる。しかし、現代的解釈では、原因・結果の必然的結合は、「演繹的推論の形式」にあるとされ、因果的な結合の固有性を表現するものではないことになる。

黒田は、因果性そのものを、ヒュームが元来目指した生成論的な立場から探求する必要があると論ずる。

「X は……した」という形の言明は、行為とその結果を特定の主体に因果的に帰属せしめるものであり、行為命題とはすなわち因果命題である、と述べた。この種の言語表現こそ範例分析の対象たるべきものであろう。因果性の理解と行為の理解とは、根元において一つのものである [黒田 1975: 279]。

黒田は、行為に固有な因果連関を解明するために、次のような M. Black の因果命題（行為命題）の範囲分析を参照する。

A: PA1 → OM

いま私が手をのばして机の上の灰皿を前方に押しやる。このきわめて単純な構造の行為について考えてみよう。一般的な形で表現すれば、これは、特定の人 (P) が、ある簡単な動作 (A1) によって、一つの物体 (O) に、一定の位置変化を生ぜしめる行為 (A) であって、上のように記号化することができよう。さて「P が O を動かした」、あるいは

「因果的説明」のポリティックス (I)

「P が A1 によって O に M を生ぜしめた」というかたちで行為を記述する命題は、同時にまた因果命題である。

(1) 「P が O を動かした」と言えるのは、P が A1 の動作を自由に行った場合に限る (他の人の強制で動いたのではないこと)。

(2) A1 と M の同時性という条件。

動かしているとき同時に動いている。

動かすもの (agent) と動かされるもの (patient) の区別が体験的もしくは視覚的に明瞭であること。

(3) PA1 という動作がなければ OM という変化は生じなかったであろう、と言える場合だけである。すなわち、PA1 は OM の必要条件でなければならない。(この状況においては、と言う限定のついた必要条件)。

(4) この状況においては、PA1 は OM の十分条件でなければならない [黒田 1975: 280-281]。

このような因果命題 (行為命題) の範例分析によって、規則的・整合的な運動という状態を破るのが動作であり、「地」としてのノーマルなあり方と、「背景」としての行為の因果連関を明確に析出する、としている。こういった了解は、推論によるものではなく、端的な「知覚」の事柄であると結論する。こうして、黒田は、因果の知覚説 (perceptual theory of causation) と呼ばれるものに到達する。これによって因果的な言明の意味が問われる次元と、その検証手続きが考察される次元とが正確に区別できるとしている [黒田 1975: 282]。すなわち、因果性の真偽を問うのは、検証手続きの中でなされればよいが、因果性そのものというものは、知覚として前提的に設定しなければ、行為の理解というものは成しえないという主張である。我々は、どこかで因果の概念を学ぶという創造的経験をして、因果了解の基盤としていると論じている。黒田は、terekinesis の存在を説明しようとする営みも、虚構性を立証しようとする科学者の営み

も、すでに「因果」の理解を前提した営みに変わりはないとしている [黒田 1975: 283].

黒田は、近年の他の論者とは対象的に、因果性を生成論的に捉えることによって、行為の根元にあるものとした。原因と結果はいかなる関係にあるか、それはどのように検証されるのか、という因果論のいわば利用法を考えていくのではなくて、因果というものが行為に関する認識のどこに位置しているかということを問う上では、重要な知見になるものとおもわれる。しかし、どうして、ここまで因果的説明にこだわる必要があるのだろうか。それには、彼の行為についての定義からみていく必要があるだろう。

黒田は、行為を考える場合、その定義の外延から考えていくのではなく、最も典型的な誰も行為と疑わないものから出発しようとした。というのは、行為概念の境界部分を確定する外延的定義も成功してこなかったし、「目的」「自由」などという概念から行為との「関係」にずらして論じること、行為を定義したことにならないからである。そのため、

この際、逆に考察を「行為」概念の中心部に向けそれが行為であることをだれも疑わないような典型的な事例について「行為」という言葉の用法または意味を分析してみたい。そういう典型的、範例的な行為を「意志行為」と名づけよう [黒田 1985b: 13].

という方針を立てたのである。この「意志行為」という概念は、G. Anscombe らにならって、自分が「何」をしているのか、「なぜ」そうしているのかひとに問われて即座に観察によらずに答えられる場合の行為を指す。先の行為命題で、P が意志行為を行ったとわかるのは、P という主体が O を動かしたと即座に観察によらずに答えられるからというわけである。これによれば、「ある人間の振舞いは、それを彼の意志行為と見なせるような記述が少なくとも一つは見いだされる場合、単なる出来事ではなく、まさしく彼によって成された行為である [黒田 1985b: 15]」.

さらに黒田は、意志行為による「行為の因果連関」とまったく並行的に

「因果的説明」のポリティックス (I)

起こる「出来事の因果連鎖」を想定し、二つが重なり合うものを基礎行為とした。例えば、「私が右手をあげる」という意志行為は、同時に「私の右手が上がる」という出来事でもあると黒田は考えたからである。後者は、純粋な自然現象であり、生理現象の因果連鎖として、一定の筋肉収縮や、神経伝達の過程、それを誘発した感覚的な刺激やその原因というようにいくらかでも連鎖していく因果の束と捉えられた。すなわち、

一方に、人格主体の自発的動作とそれによって実現される事態との間の垂直的因果連鎖があり【人格主体の意志行為】、他方に、物理的・生理的・心理的な出来事の系列として、いわば水平方向の因果連鎖【社会的・道徳的・文化的な意味を抜いた単なる身体運動】が考えられる。そして、この二つの考察が交差するのは、まさに基礎行為という事実においてなのである【黒田 1985b: 64】。([] 内は引用者)

物理的・生理的な観点で基礎行為を見ると原因は連鎖によって無限に続いており、科学的法則を作ることでモデル化できると黒田は考えた。しかし、行為者が対象に対して関わり合うという観点で基礎行為の原因を探っていくと、究極的には行為者が行為をするという「原因」に至らざるをえない、それだからこそ行為者の責任として問われるのである。すなわち、

行為の因果連鎖を原因の方向に向かってたてれば、それは基礎行為とその主体たる人格存在によって区切られるが、出来事の原因の連鎖は無際限に続いている【黒田 1985b: 65】。

こう考えていくと逆に、「意思行為」とは、行為のはじまりすなわち、原因が行為者自身の内にある行為である【黒田 1985b: 53】。さらに、行為とは、「自分の動作で世界に一定の変化を起こすこと、いわば自分自身が世界の変化の原因になることである【黒田 1985b: 51】」と結論づけている。

これによれば、人は、行為の原因者となることで世界との関わりを持ち、世界を変化させているのである。行為の原因者すなわち主体としての人間が世界に対して働きかけているという記述は、日常的な理解としても十分

なりたちうるものである。

こうした黒田の因果論に対して、さまざまな批判が行われている。例えば、『理想』では、「全てが因果」ならば因果性論の検証が不可能なのか、因果了解を法則了解としてもよいのではないかという議論がされている[黒田; 加藤; 丹治 1984]。また、守屋唱進は、黒田の知覚に関する「因果説」を「経験因果説」として位置づけ、より広い脈絡に位置づけようと試みた[守屋 1991: 200]。さらに別の視点からは、因果を二つに分けることによって、「出来事の連鎖」というもう一つの科学主義を認めてしまうのではないかという問題もある。

しかし、ここで注目したいのは、哲学的考察を意思行為という単位から考えていったということである。範例的な行為を意志行為とすることには問題はないだろうか。また、逆に、因果を行為の基礎においたからこそ、意志行為にとらわれ、意志行為から行為を考察しなければならなかったとはいえないだろうか。

黒田の生成論的に考察したいという意図はよくわかるし、その根元に「因果」というものがあり、知覚を基礎づけているということは、直観的にも理解できないわけではない。確かに我々は、「因果」というものを利用しながら世界を見つめ、経験している。「SF 的状况でわれわれの因果了解の一部が系統的に覆されることがあっても、因果を信じ、その異常の因果的説明を求めるといふ生き方は変わらない[黒田; 加藤; 丹治 1984: 155]」と黒田が述べているとおり、常識的見地からも因果性の理解というものが存在していることは否めない。しかし、第一に、「行為することと物を知ること、これは根本的に一つのこととしてみるにはどうしても因果という概念が不可欠[黒田; 加藤; 丹治 1984: 156]」であるというような、因果の一元的な理論に成りかねないし、第二に、人のある動きが「意思行為」として現出するのはどの様にしか、という問題はさらに残ってくるように思われる。黒田も述べているように、我々は、行為に関する記述によってでし

か意志行為の存在を明らかにできないし、意志行為が存在するとはすなわち記述や知覚が現象を捉えたときに限るのである。次章では、エスノメソドロジー・会話分析的な見地になつて、黒田の行為論を別な観点から位置づけてみたい。

第二章 エスノメソドロジーと因果的説明

黒田の分析は、人格主体の単一の行為を中心にして他の行為や出来事と関わりあわせて考察していつている。エスノメソドロジーや会話分析が行為を考察する場合は、活動の連鎖（相互行為）や記述の連鎖という場面から考察していくのである。そして、特に会話分析をするときのもう一つの違いは、相互行為の中心部分を実際の相互行為過程の記録から考えていくということである。これは、黒田の行った基礎行為から考えるという方法与志向を同じくし、行為の定義の外延から考えるのではなく、最も明らかなものから考察していこうとするものである。

会話分析の場合、行為の定義として最も明らかな場合を考えたのではなく、相互行為の記録や記述という元来、前提としておかれるデータをもとにして考えていくのである。すなわち、

私は、録音された会話を使って作業をはじめたい。そのような資料は繰り返し聞けるという一つの良さを持っている。どうにか写し取ることも引き続いて研究することもできる。どんなに長くとも、録音された資料は、起こったことの「実に良い」記録である。そのほかのことも確かに起こる。しかし、少なくともテープに起こったことは起こったのだ [Sacks 1984: 26].

さらに自然言語を記録することによって、何度も分析することもできるし、誰にでもわかるようにデータを提示することもできる。これにより、分析者が、行為を定義上で限定していくことによって読み手を説得するという誤謬も避けられるように思える。

黒田の方法とのもう一つの相違点は、日常的な知識から行為を考えていこうとした点である。世界で実際に起こることは、理念的にはいかに間違っていようと、合理的には説明できないことであろうとそのように起こってしまい、考えられてしまうのである。それを H. Sacks は次のように表現した。

ソクラテス以前から少なくともフロイトまで革命的といわれ扱われてきたものの第一段落、第三段落かもしれないが、を見てみると、奇妙な事事が明らかになってくる。彼らは、すべて何かこのようにいいながら始めていることに気付くだろう。「私がこれから話そうとすることについて、一般の人は知っていると思っているが、知らないのである。さらには、あなたが人にそれを言っても何も変わらないのである。彼らはいまだ知っているかのように歩いている。夢の世界を歩いているにも関わらず」ダーウィンはこのように始め、フロイトも同様に始める。我々が関心あることは、人が知っていて使っているように見えているものはいったい何か、ということである [Sacks 1968]。

このように、「常識的知識」を誤りであると退けるのではなく、それがどのように成り立っているのかを捉えようとしたのがエスノメソドロジーであり会話分析だったのである。エスノメソドロジーや会話分析の立場からは、実際の行為場面はどの様に分析できるのだろうか。因果論的な考察と対比的に述べながら説明していきたい。もちろん、黒田の因果論は、実際のデータの分析には向いていないことがわかる。彼自身も、「我々の持っている因果の概念というものと、因果概念を個々の場合に適用した一つ一つの場面の検証の問題は、(中略)それは別次元の問題 [黒田; 加藤; 丹治 1984: 155]」であると述べている。データを分析するのは、「哲学的」ではないという反論もあるだろうが、哲学的考察でも行為を例示して示す説明方法が取られていることを考えると、実際の現象を前にして何も言えないはずはない。また、そうすることによっていわゆる反証可能性も生まれて

「因果的説明」のポリティックス (I)

くるだろう⁽²⁾.

【1】 [山田 1991: 100] (カッコ内は、沈黙の秒数) M: 母親, H: 子ども

M1: 消してきて

→ (3)

M2: ひろくん, 消してきて

H3: お母さん, 消せ

M4: じゃあ, じゃんけん負けた人がいくんよ

H5: わかった

母親と子どもの会話である。母親が、何かを「消してきて」と子どもに頼むが、子どもは何にも言わないので、もう一回消してくれるように頼むが、子どもは拒否してじゃんけんで負けた方が消してくることになる、ということはごく常識的に理解できる。

問題は、矢印の部分である。明らかに子どもが「答えない」で、「沈黙」をしていることが見て取れる。なぜだろうか。冒頭でも述べたが、「沈黙」という行為は、ただ発話していないという状態があるだけでは成立しない。発話していないというだけなら、母親もそうであるし、母親が話し続けないから、黙っているということもできる。「消してきて」の後で「こなくていいよ」といいたいのに黙っている、と理解することも、もしかしたらできるかもしれない（前を車が通ってうるさかったから途中で黙ったなど）。この場合、沈黙ではなく一つの発話の中の「ギャップ」となる。しかし、母親が、途中で黙ったというようには、そのための特別な証拠が出てこない限り、このデータからは常識的には理解できない。3 秒間の発話の途切れは、次の発話の連鎖を見ることによって、子どもが行った沈黙という行為であることがわかる。

黒田流の解釈をすれば、子どもは、発話をしないということで世界に一

定の変化を起こしているのです。沈黙という基礎行為が行われたということができるだろう。この意味では、子どもは、沈黙した時点で基礎行為の原因者として責任を負うのだろうか。そうではない。3 秒間の沈黙が起こった時点では、子どもが聞き逃したとも受け取れる。すぐ後に母親の質問があって、それを子どもが拒否するところに至ってはじめて沈黙が子どもの行為であることがわかってくるのである。すなわち、後の会話の継起を見ることによってのみ、3 秒間の沈黙が子どもの行為であるという「場面の特徴」が出てくるのである。子どもが、沈黙によって、質問に答えることを拒否しているということも、相互行為の継起を見ることによってしかわかってこないだろう。従って、黒田のいう基礎行為も、場面 (settings) の特徴として現れ出てくるものであると考えるのが妥当ではなかろうか。ある人が行為を行ったと言えるのは、特定の形式の相互行為や記述というものがあって始めて成り立ちうるものではなかろうか。確かに、黒田の言うように行為者が原因となって世界を変化させているように見えてしまう。これは、常識から言っても納得できることである。しかし、我々は、何を見てある行為が行われたということが出来るのだろうか。エスノメソドロジーや会話分析が出てくるのはこの文脈においてである。

エスノメソドロジーは、発話行為論などと同様に、「発話内の力」を問題にしていく研究である。その際に、シークエンスにおける含蓄 (sequential implicativeness) を実際の会話の流れにそって参加者がどの様に読み取り実践をしているのかを忠実にたどっていくのである。隣接対の概念を利用しながら【1】の一連の会話を分析してみよう [山田 1991: 97-103]。

矢印の部分が子どもの沈黙であることは、母親の依頼の後におかれ、「受諾」していないからわかってくる。これは、文法上の問題ではない。もちろん「沈黙」そのものの意味上の問題でもない。「沈黙」という参加者両方がしていることが、一方の参加者の「沈黙」となるのは、依頼の後の受

「因果的説明」のポリティックス (I)

諾の欠如という会話の継起上 (sequential) の位置づけによってのみからである。依頼 (第1ペア)/受諾 (第2ペア) という隣接対の第2ペアが存在していないからである。依頼 (第1ペア) に対して予測された受諾 (第2ペア) が現われず、沈黙がきたことで、母親は、もう一度依頼 (第1ペア) の発話を行う。受諾が拒否されたとはっきり決定的になるには、M2の「依頼」の繰り返しに対して直接的な「拒否」を行ってからである。ここにきてはじめて、最初の沈黙が、拒否という発話の一部を成すものと理解できる。これらは、会話の非優先的組織化といわれるものである。「依頼」の「受諾」であれば、すぐさま答えることになる。しかし、「依頼」に対する非優先的な第2ペア (拒否) が来る場合は、沈黙や前置き、言い訳などという特有の会話の組織化がなされることになる。そこで重要なのは、依頼/沈黙、依頼/拒否という隣接対をローカルな場面で適用したために、沈黙という現象が「子どもの行為」として現れ出たことである。こういう説明作業 (accounting) があるからこそ、「行為」や「因果」とよばれる現象がそこにあるかのように観察でき報告できる (observable-and-reper-table) のである⁽³⁾。

このように「因果」は、局所的な相互作用に敏感になることによって創発するのである。とくに、相互作用や記述の順序や連鎖という形式的特徴は、我々が行為を理解する上で最も敏感になることである。局所的な秩序化は、最も基本的な相互行為である。それによって、「行為」を特定でき、「因果」を推定することができるようになると考えられる。

黒田の因果論の基礎には、行為者という主体が、行為、非行為者と独立に存在しうるという前提があるため、「因果的説明」が現実の場面でどのように作用しているのか語り得ていない。社会のメンバーは、ある結果に至った原因を追求し、その原因に責任を負わせるという作業を、継続的に行っている。社会のメンバーがあたかもそこにあるように行っているという点では、黒田の因果論は現実の貴重な側面を指摘しているだろう。ただし、

その因果というものが、素人 (layman) によってあたかもあるように語られ、常識的世界で力を持っているからこそ因果が根元的に存在するのである。黒田のアプローチとは対照的に、エスノメソドロジーは、因果的な説明を一つの現象として捉え、素人の作業として分析していくものである⁽⁴⁾。

第三章 日常的場面における因果的説明

これまで見てきた通り、因果的説明は、相互行為や行為の記述の形式的特性からいわば外在的なものとして生み出される⁽⁵⁾。日常的な場面では、「科学的に非合理」なものでも、どう考えても非論理的なものでも、メンバーによって「可能な記述 possible description」として認められる限りにおいて、因果的説明は共有され利用可能になってくる。例えば、「マンガばかり読んでいると想像力がなくなる」とか「氣力が充実していたから試合に勝てた」といったものである。冷静に考えれば何も関係ないと思われることでも、あるコンテクストにはまってしまうと因果律が働いていると見えてしまうのである。因果的説明をするということは、日常的世界においてどのような意味をもってくるのだろうか。原因を特定し、結果を予測するという日常的な作業はどのようになされるのだろうか。これを考えていく上で、参考になるのが、因果的説明がはされない場合や対立した場合である。ここでは、それを「リアリティ分離 (M. Pollner)」の一形態として考えてみよう。リアリティ分離とは、世界についての相矛盾した複数の経験が存在する状態である。こういう状態に至った場合、どちらが現実を誤って知覚しているかを定めること自体が問題となってくる [Pollner1975=1987: 42]。

具体的な例として、ある知覚が幻覚である、すなわち幻覚が原因で知覚を持ってしまったとされる場面を考察してみよう。ある人が幻覚を見ているとするには、その人が普通は考えられないような「異常な」ことを言うだけでは不十分である。「馬が空を飛んでいる」とか「神の声を聞いた」と

発言することは、普通に考えると会話では出てこない。しかし、この発言を行ってよい場面では、通常の出来事として理解できる。例えば、映画や芝居の中のせりふとして、宗教活動の一貫としてこれらの発言がなされるならほとんど何も問題にならない。そういった場面では、知覚体験が交錯することなく「馬が空を飛ぶこと」が共有される。ここで、生物としての馬が空を飛ぶなどと考えられないと反論する人がいるかもしれない。しかし、それは言語を世界の客観的な状態を表わしていると考えているからであって、現実には、言語が世界の客観的な状態をあらわしている場合はまれである。友人にあって「元気?」と問われて、「それは身体的にですか? 精神的にですか?」と客観的な状態を聞かれたと考え、問われた部分を特定化していく作業は、それ自体、場面を混乱させてしまう [Garfinkel 1967].

問題は、「馬が空を飛んでいる」「神の声を聞いた」という発言でリアリティ分離が起こる時である。その場合、どちらが現実を誤って知覚しているかを定めること自体が重要な問題となるのだ [Pollner 1975=1987: 42]. さらに、リアリティ分離が起こっただけでも、知覚が幻覚であるとされるとは限らない。なぜなら、誤った知覚とされるのは、「見誤り」「思い違い」という一時的でその場限りの一過性の現象として処理されるからである。

ある人が幻覚を見たというのは、継続した何かが「原因」になっていることを示さなければならない。そのためには、一方の知覚を「幻覚」、もう一方の知覚を「正常な知覚」と振り分け、「元々幻覚を見ていた」というコンテキストをつくり出さなければならない。一方の経験を指示し、判断基準とし、推論の土台として使う活動、すなわち、リアリティ経験を次の推論や行為の土台として使うことにより、幻覚を特定化することができる。モノとして外在する「原因=幻覚」を顕在化するのは、日常的な相互作用におけるプラクシスの中においてである。

しかし、このことは、ある発話や行為に原因があったことを示すのではない。相互行為が局所的に秩序化されていることを考えると、その原因が次の場面では払拭されることもありえる。原因を特定化し、了解する作業は、「ポリティックス」として相互行為の特性を創発する作業である。その世界的世界に於て、我々が因果的に物事を考えているのは否定できない事実である。そして、エスノメソドロジーや会話分析の視点からそれがいかなる作業で行われているかを見ていく場合、因果的な説明とはポリティックスなのである。その詳細な研究の可能性は、今後に開かれている。

注

- (0) 本稿作成に関して、次の多くの方のお世話になった。山岸 健教授、東京都立大学の研究会の方々、科学研究費補助金（代表者：江原由美子、お茶の水女子大学助教授）による会話分析に関する研究会の方々には、特に感謝してやまない。
- (1) 原因の決定は、一様にいかない。必要な先行条件は同じでも、「ガスタンクの近くでマッチを擦ったら爆発した」（火をつけたのが爆発の原因）と「部屋でマッチを擦ったら爆発した」（ガス漏れが原因）という相違が出て来る。一般的に、通常の出来事でなく突発的に介入した出来事の方が原因となる。[武笠 1991: 184]
- (2) 黒田は、さきに指摘した通り、検証の問題は別次元だとしている。しかし、自然言語を分析するということは、1960年代までほとんど行われてこなかった。というのも、自然に生起する言語は、あいまいで、文法的でなく、私的なものとされてきたからである。それとともに、録音という技術がなかったために、再生して何度も分析することなど思いもよらないことだったからである。驚くべきことに、言語学でも自然言語を扱うということは、近年まで行われてこなかった。
- (3) 相互行為場面をビデオに撮って分析する「ビデオ分析」を利用すると、会話分析よりもっと詳細で、瞬間瞬間の活動が相互行為的に構成されていることがわかる。これによれば、咳をすることやコーヒーカップを持つこと、鼻杖をつくことなど個人の特性だと考えられ、実際の場面ではランダムにあるいは「主観的に」、「反応」として扱われていた活動が、相手の活動と織り合わされていることがわかる。

「因果的説明」のポリティックス (I)

- (4) 局所的な秩序化は、自然言語において起こるだけではない。行為に関する記述についても働いている。H. Sacks は、子供が作った話についての分析を試みた。

【2】[Sacks 1974]

赤ちゃんが泣いた。……S1

お母さんが抱き上げた。……S2

このように、二つの記述が並んでいるだけでも関わらず、次のようなことが観察できる。文 S2 の「お母さん」は「赤ちゃん」の「お母さん」であること。文 S1 は出来事 O1 を表わし、文 S2 が出来事 O2 を表わすとすれば、O2 は O1 に引き続いて起こったと読み取れるし、O1 が起こったから O2 が起こった（赤ちゃんが泣いたから、お母さんが抱き上げた）と読み取れる。等々。二つの文がたまたま並んでいたと考えるのではなく、二つの文を関連させ、出来事の連続とした物語として読みとることができるのである。「赤ちゃんが泣く」ということが原因で「お母さんが抱き上げた」ことが結果として起こっていると読み取れる。H. Sacks は、メンバーを「カテゴリー化する装置 (Membership categorization device=MCD)」と「カテゴリーに結びついた活動 (category bounded activities)」を利用することによって以上のように見えて来るとした。S1 の赤ちゃんは、「人生の一段階」装置 {赤ちゃん, 子供, 大人, 老人} の要素カテゴリーを適用され、「泣く」という活動が正当化される。もし、「泣く」のが当り前の時（ケガをしたときなど）に、「赤ちゃんが泣かない」ならば、それは観察可能になり、賞賛されることになる。一方、S2 は、「赤ちゃん」と「お母さん」を連続したものとみて、「家族」装置という MCD を利用することになる。「お母さん」は「赤ちゃん」を正当なものとして抱き上げるのである。二つの文のこういった形式的な特徴を組織化し、意味あるものとして構成していくからこそ「原因」や「結果」を特定したり、指摘したり、「責任」を追求したりすることができるのだ。

- (5) 同様に、「動機」があたかもそこにあるように見えてしまうことについて、J. Coulter は、C. W. Mills を議論を参照しながらエスノメソドロジ的な問題として捉えなおしている [Coulter: 1989 第2章]。

参 考 文 献

Coulter, J.
1989 *Mind in Action*, Polity Press.

Garfinkel, H.

1967 *Studies in Ethnomethodology*, Polity Press.

1988 "Evidence for Locally Produced, Naturally Accountable Phenomena of Order*, Logic, Reason, Meaning, Method, etc. in and as of the Essential Quidity of Immortal Ordinary Society, (I of IV): An Annoucement of Studies" *Sociological Theory* 6: 103-109.

Garfinkel, H. et. al.

1987 『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体—』山田; 好井; 山崎訳, せりか書房.

Heritage, J.

1984 *Structures of Social Action*, Cambridge University Press.

Jayyusi, Lena

1991 "Values and Moral judgement: Communicative Praxis as Moral Order" in Button, G. (ed) *Ethnomethodology and the Human Sciences*, Cambridge University Press.

黒田 亘

1975 『経験と言語』東京大学出版会,

1983 『知識と行為』東京大学出版会,

1985a 「言語と経験」『新岩波講座, 哲学, 第 2 巻』岩波書店.

1985b 『行為と規範』放送大学出版会.

黒田 亘; 加藤尚武; 丹治信春

1984 「哲学の根本問題」『理想』No. 616.

守屋唱進

1991 「経験される因果」飯田; 土屋編『ヴィトゲンシュタイン以後』東京大学出版会.

武笠行雄

1991 「因果性と説明形式としての志向性」飯田; 土屋編『ヴィトゲンシュタイン以後』東京大学出版会.

西阪 仰

1989 「行為の説明 I」『明治学院大学論叢』443 号, 社会学・社会福祉研究 81: 41-78.

Pollner, M.

1975 "The Very Coinage of Your Brain': The Anatomy of Reality Disjunctrue" *Philosophy of the Social Sciences*, 5 pp. 411-430.

=1987 「お前の心の迷いです」in Garfinkel et. al.

「因果的説明」のポリティックス (I)

Sacks, Harvey

- 1968 in Hill, R; Crittenden, K. (eds) *Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology*, Purdue Research Foundation.
- 1974 "On the Analyzability of Stories by Children" in Turner, R. (ed). *Ethnomethodology*, Penguin.
- 1984 "Notes on Methodology", in Heritage, J. (ed).
- 1978 "K is mentally ill" *Sociology*, 12 (1): 23-53.
=1987「K は精神病だ」 in Garfinkel et. al.

Weber, M.

- 1922 =1972『社会学の根本問題』清水 訳, 岩波書店.

山田富秋

- 1991 「子どものけんかに見ることばとからだ」 in 山田; 好井.

山田富秋; 好井裕明

- 1991 『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社.